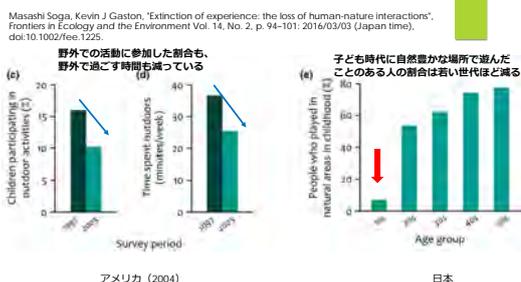


基調講演： 自然との豊かな関わりがもたらす子どもの育ち
 ～未来の社会を見据えた質の高い幼児教育とは～

講師： 上越教育大学 山口美和

先進国、特に日本を含む多くの国々で、現代の生活スタイルとテクノロジーの進化で、子供たちと自然の接触が著しく減少している。データを見ると、子供たちの自然との関わりが年々低下し、多くの子供たちが山登りや釣りなどの自然体験をしたことがないことが分かる。この自然離れが、子供たちの心身の健康や生活の質に悪影響を及ぼす可能性が高い。



自然との接触が減ると、自然への関心や保全意識も低くなる。この悪循環を打破するため、大人たちが積極的に子供たちに自然体験の機会を提供する役割を果たすべきだ。自然体験は、心と体の健康を向上させ、環境に対する責任感や保全意識を育むのにとっても価値がある。

山野井さんの調査によれば、小学5、6年生の自然体験の頻度やその影響要因には、学校周辺の自然環境、子供自身の自然への関心、そして保護者の態度という3つのポイントがある。保護者の自然への積極的な態度や子供の興味は、自然活動への参加を促す大切な要素だ。

国立青少年教育振興機構の調査や過去のデータを見ると、体験活動を通じて子供たちの自己肯定感が向上することが示されている。特に、自然や生活体験をした子供たちは、一般的に自己肯定感が高く、特に体力に関する自信との強い相関がある。

しかし、経済的な格差や忙しい生活スタイルで、多くの家庭で子供の体験機会が制限されている。この背景を考慮すると、幼児期から

自然体験・生活体験と自己肯定感との関係

- 体験と自己肯定感の関係
 - どの学年においても、自然体験や生活体験が豊富な青少年ほど、自己肯定感が高い傾向にある。
 - 自己肯定感の中でも特に、「体力には自信がある」については、自然体験や生活体験とより強い関係が見られる。

↓

自然体験と生活体験を重ねると体力に自信を持つ子どもが増加する。体力に自信を持つ子どもは、「自分が好きで、自分らしさをもつ」ようになっている。(報告書より)

一方、自然体験・生活体験の機会が学校等で経験するものを除けば、**家庭の意識によって二極化(多いが極端に少ないか)している**

の体験の差を埋めるための、保育や幼児教育の場での自然体験や生活体験の提供が求められる。このための取り組みとして「自然保育」という概念が生まれ、日本全国で普及している。

自然保育では、子供たちが主体的に自然と触れ合い、五感をフルに使って学び、成長することを重視する。鳥取県や長野県を先駆けに、多くの県で自然保育の認証制度が導入され、それに伴い、認証を受けた園や施設での体験活動が奨励されている。

昭和 28 年には、子供たちが手作りの遊び道具を楽しむ姿がある。現代の子供たちはゲームを中心に遊ぶ傾向が強く、リアルな対面の遊びは少ない。この変化の背景には、保護者の安全への懸念や、自然での遊びに対する抵抗感がある。一方、多くの保護者は自然体験を重視し、保育所での実践を望んでいる。でも、保育者自身が自然活動の実施にハードルを感じていることが問題だ。

幼児期に育つ非認知的スキルについて

Heckman, James J. "Giving Kids a Fair Chance"
(ジエームズ・ヘックマン『幼児教育の経済学』)
「人生で成功するかどうかには、認知的スキルだけでなく、非認知的な要素もまた欠かせない。」

肉体的健康、精神的健康、根気強さ、
注意深さ、意欲、自信
(=社会的・情動的性質)

これらのスキルのほとんどは幼少期に発達する



大規模な調査や研究で、幼児期の外遊びが子供の非認知的スキルの発展に寄与していることが分かってきた。特に、「レジリエンス」や「自己肯定感」のような精神的な健康や社会的スキルの向上に関わる要素がある。外で遊ぶことのできる子供たちは、さまざまな経験を通して、これらの能力を育てている。彼らは新しい環境に

も柔軟に適応し、友達との関係も豊かだと示されている。これに対し、室内遊びが主の子供たちは自己肯定感が低い傾向がある。外での活動を通じて、子供たちは試行錯誤を繰り返し、多くのスキルを手に入れている。

広島県の森の幼稚園で、子供たちは火をつける体験をした。火はつかなかったが、そのプロセスは貴重な学びとなった。自然の中の体験は待つことが多く、保育者の耐性と子供たちの好奇心が求められる。また、安全管理も大切だ。安全のためのルールや、子供たちの意識を高める工夫が必要だ。しかし、その中での遊びや体験は、子供たちの成長にとって非常に価値があると信じられている。

自然との関わりは、人々の生活や健康にとって非常に重要だ。特に、現代の情報過多な社会では、自然との接触がストレスの軽減やリラックスのために有効だ。しかし、多くの子供たちがこの価値を知らないまま大人になることは望ましくない。だから、大人たちが積極的に子供たちに自然との接触を奨励する役割を果たすべきだ。

自然と子どもをつなぐために

まずは保育者自身が、日常の中で触れているささやかな自然の変化に目を向け、五感で感じましょう

見る（視覚）だけでなく・・・

触ってみる（触覚）：ゴツゴツ、ザラザラ、すべすべ、チクチク

嗅いでみる（嗅覚）：いい匂い、酸っぱい匂い、臭いニオイ

味わってみる（味覚）：甘い、酸っぱい、渋い、苦い

耳をすませる（聴覚）：鳥の声、虫の声、風の音、落ち葉を踏む音

その感覚と感動を子どもたちと共有しましょう

今後も、子供たちの自然体験や生活体験の機会を増やす取り組みが求められる。そして、それを支援する大人たちの役割も大切だ。安全管理や体験活動の内容、教育方法など、さまざまな点での工夫や努力が必要だ。しかし、子供たちの未来や社会全体の健康のため、この取り組みは続けられるべきだ。

自然との接触や体験は、単なる楽しみや遊びにとどまらない。それは、子供たちの心の健康、社会性の形成、そして環境への関心や価値観の形成に深く関わる要素である。今の時代において、テクノロジーが日常の中心となりつつある中、自然の中での体験は、私たちが持つ原点や根底の価値を再認識させるものだ。保護者、教育者、そして地域社会全体が連携し、子供たちに自然との関わり大切さを伝え、体験の場を増やしていく努力は、次世代を育てる上で欠かせない役割を果たしている。これはた

だの流行や趣向に過ぎない。未来の子供たちが豊かな心と健やかな体で、持続可能な世界を築く礎となるのだ。私たち大人が果たすべき役割は、この大切な体験の場を提供し、サポートを続けることである。

自然の中での主体的な体験

子どもたちが

- ▶ 自然の美しさや不思議さを感じ探求することができるように
- ▶ 日々の生活を自ら営み、楽しむことができるように

直接的な体験の機会を保障すること



子どもが自然の中で自ら環境に働きかけ、
主体的に考え行動するための機会を保障する

未来を見据えた幼児教育の役割

